

『2022 年度 春学期・第 1・2 クォーター学生による授業評価報告書』刊行にあたって

学長 高橋秀裕

2022 年度春学期末に実施した学生による授業評価アンケートの集計結果がまとまりましたので、ここに報告書として刊行いたします。このたびの調査にご協力いただいた学生の皆さん、授業担当の先生方、アンケートに関する検討会の先生方、担当の事務局職員の各位に深く感謝申し上げます。

本学の授業評価アンケートは組織的な FD 活動の一環として、他大学に先駆けて実施されてきた事業です。まさに PDCA サイクルのチェック部分にあたり、授業ごとの具体的な効果や問題点を把握し、教員による教育改善に役立てていただくことを目的としています。授業レベルの改善について、是非この報告書を積極的に利用していただきたいと存じます。一方で、コロナ禍を通じて、大学教育に対する先生方の視野も大きく変化したものと思われまます。カリキュラム全体を見通しながら、具体的な授業レベルでの学生の到達状況を把握し、教員個人の授業改善はもとより、学科、学部の組織的な改善活動にもつなげていただければ幸いです。

さて、コロナ禍の影響だけではなく、現代社会のさまざまな変化は、教職員が気づかない形で、学生の生活や考え方に影響を与えているという指摘もございます。そうした学生の変化を大学の授業や運営に取り込もうとする場合、学生は実際どう変わっているのか、大学はそれにどのように対応していくのかといった問題があります。こうした問題を含めて大学教育に関して議論するとき、それが大学側の目線、とくに教員目線でなされるのではなく、「学修者が『何を学び、身に付けることができるのか』を明確にし、学修成果を学修者が実感できる教育」、すなわち、学修者本位の教育を強く意識し、大学が「学生を教育する」という視点から、「学修を促進させる」という視点への転換を図る必要があります。このことは決して易しいとは言えませんが、すべての教職員の努力に大きくかかっており、着実に進めていかなければならないと考えています。

学修成果・教育成果の把握あるいは可視化は、学修者本位の教育を実現する観点から、ひとり一人の学生が自らの学びの成果（学修成果）として身に付けた資質・能力を自覚できるようにすることが重要です。それは、「卒業認定・学位授与の方針」に定められた学修目標の達成状況を可視化されたエビデンスとともに自ら説明できるように複数の情報を組み合わせた多面的な形で行われることが必要です。また、大学も、学位プログラムを通じて、そうした資質・能力を備えた学生を育成できていること（教育成果）を、学修成果と同様に説明できることが必要です。

本学では教育 DX を推進していますが、来年度から、いわゆるデジタルライゼーションの段階として、現在利用している学内の学務システムなど各種システムを更新します。また、教育部門では教員・職員と十分議論を重ねながら、LMS や CRM といったシステムの導入を推進し、まさに学生が自らの学びを可視化でき、達成感が得られるような支援システムの仕組みを確立しなければなりません。

大正大学 DX の実現をめざし、今後さらに「学修者本位の教育」、学修成果の可視化、教育成果の可視化に向けての取り組みが求められています。関係各位の益々のご理解とご協力をいただくとともに、さらなる授業改善に努めてくださいますようお願いいたします。